



北脇三智也氏・藤井茂樹氏による対談

特別支援教育コーディネーターの役割

北脇／特殊教育から特別支援教育に移行した当初の役割だけでは不十分。現在の特別支援教育は、第 2 段階、授業のユニバーサルデザイン化に向かっている。特別支援教育の目指すものは、ユニバーサルデザインを踏まえたインクルーシブ教育。「共に生き、共に育つ」。そのため、コーディネーターが校内的に授業研究や校内研究にも関わっていくべきだが、その役割がまだ究明されていない。

藤井／特別支援教育は、通常教育の延長であり、特殊教育の延長ではない。しかし、コーディネーターが特別支援学級の担任が担当が多い。通常学級の授業を考えるに当たっては、教科教育の中で授業改善の話し合いが出来るようなシステムにする必要がある。

北脇／教科研究が活発に行われなくなったことがネック。出張や旅費・勤務時間の制約がある。教科研究を同好会形式のような制約の少ない形で深めることができないものか。

藤井／ひとつの提案。小学校におけるコーディネーターの役割。小学校 1 年生の 1 学期に国語科・算数科で、基本的な内容を徹底するシステムが出来ないか。国語科では、ひらがな・カタカナ・促音・拗音・濁音などの表記や読み。算数科では、10 の分解と合成・繰り上がりや繰り下がり。1 学期末にチェックして、夏休みに教科の専門の先生やことばの教室の先生が入って支援する。こんな形を校長会などで提案して欲しい。その時の窓口はコーディネーターがなっていく。

北脇／ADHD PDD そして今、LD の子どもへの対応が残されている。長浜市では、5 年生の子どもがどこでつまづいているのかを見るためのテストを考えている。LD の子をきちんと把握して対応を考える必要がある。それを進めるために、コーディネーターの役割が大きい。しかし、コーディネーターは校内の方向付けをする立場で動けばいいのではないかなと思う。

藤井／高等学校にはかけ算の 7 の段・8 の段ができない子がいる。小中学校の段階できちんと把握して手当てされていないわけ。これは特別支援教育ではなく、通常の教育の中身です。これについてコーディネーターがきちんと指摘できるかどうか問われているところだ。

北脇／学力不振の原因はどこにあるのか、なぜ点数が取れないのかの説明がなされないのです。誤答分析をする必要があると思

います。自分たちの授業と結びつけて教科の成績を見つめていくという体制が取れていないんじゃないかなと思います。

藤井／学力の基礎・基本と言いますが、どういうことが不明確ですね。だから、基礎・基本をやりました、といって中学校に送りますがかかけ算が出来ないままで中学校でも関わらず、高校へそのまま送ることになるんです。滋賀県では、学力不振の子を知的障害学級に進めている。知的障害と学力不振は全く意味が違います。

北脇／学力不振の子は当然通常学級で学力の回復を目指さねばなりません。とすれば、どういった授業を作ればいいのか、授業改善について藤井先生からお願いします。

通常学級の授業が変わらないといけない

藤井／筑波大学の附属小学校がユニバーサルデザイン研究会を開いています。関西では、関西学院大学の附属小学校の初等部です。しかし、附属小学校の場合、ある程度できる子ばかりがそろっています。そんな環境でユニバーサルデザインと言えるのでしょうか。一般の学校でももっと子どもの学力はもっと幅広いです。その集団がどれくらいのことかいる集団なのか調べられると、どの位の集団の中で学力が安定するのかといったことも分かってくると思います。しかし、残念ながら今は集団知能検査はやりません。集団の学力に関する把握が出来にくいので対応も考えにくいですね。気になる子だけを WISC するんですね。北海道の学校に行ったときにも感じました。「これでもまじになったんです。」という授業です。本来の授業が成り立っていない、ということなんですね。ユニバーサルデザイン以前の問題ではないかと思うんです。ユニバーサルとはすべての子どもたちができるということですね。それは非常に難しいことです。新学習指導要領のことを考えると内容が増えなくても時間数は増えません。小学校 5 年生の算数などは終われないのではないですか？ そんな現状もあり、本来の授業でわかるできないをもっと考えることも必要であると感じます。

北脇／確かに、附属の学校でなく通常の学校におけるメンバー構成から行けば非常に幅があります。学年が上がるに従って学習の到達度レベルも変化します。こういう多岐にわたる子どもたちをひとつの教室の中で教えさるのかという問題提起をされました。それは無理です。じゃあ、どうするか。教える立場から授業を構成するのではなく、子どもたち相互が学ぶ立場から授業を構想する。これが佐藤先生の言う学びの共同体という考え方だと思います。子どもたちが 4 人グループでお互いに切磋琢磨し、刺激を出し合いながら、できる子どもできない子どもお互いに力を合わせて学んでいく。これを取り入れていくと完璧ではないですが、ある程度はカバーできると考えられます。これからの授業改造は、一斉授業からの

滋賀 LD 教育 研究会総会 総会後の対談

発行日

2012/7/1

続きは、定例研究会で・・・

脱却がポイントになると思います。みなさんからの質問などの投げかけをお願いします。



鈴木／通常の学級で手当を受けていない子がたくさんいると感じます。担任の先生の対応は「家で頑張らせて下さい。」と「まだ、大丈夫です。」に分けられる。授業改善について、ひとつはハード面、電子黒板などの充実、少人数によるグループ学習や隣同士の教え合いもボトムアップの可能性があるのでないでしょうか。支援員という先生が入ってきてますが、しんどい子にだけついているようですね。

藤井／もうひとりの先生がついたからといって、発達障害の生徒に行き着いていないのが現状。授業をより効果的なものにするための話し合いが出来ていないようです。

藤井／北脇先生の本の読み合わせをする学習会などはどうでしょうか。互いのクラスのことや学校のこと出し合いました。

